

## 西田と田辺における哲学の数学的な演繹

Nishida and Tanabe proposed philosophy that it's deduce mathematical

和田 平司 林 郁枝 小幡 瞳 村上 美佐子 仲島 千江 惣門 美奈子  
西宇 洋起 仲江 考司 下坂 薫 松岡 保江

Heiji Wada Ikue Hayashi Hitomi Kobata Misako Murakami  
Chie Nakajima Minako Soumon Hiroki Nishiu Takashi Nakae  
Kaoru Shimosaka Yasue Matuoka

(所属なし)

あらまし 西田は禅の体験の「純粹経験」から「個」の「絶対無」と「その自覚」を、田辺は「種の論理」の思想の「個」「種」の哲学を数学的に演繹したものである。

キーワード 田辺の「種の論理」、西田の「純粹経験」、絶対的弁証法、絶対無

## 1.はじめに

西田は人間一世界が深く結合しており自己の内面について語ることはとりもなおさず世界の構造について語ることであり。人間の世界の連続性基本的枠組は近世的伝統に由来している。

そこで西田は「個」について「絶対無の自覚」と云ったものや「絶対無の場所」について語る。

田辺は、人間は絶対的に世界の中で孤立している論理と体験の無知を前提とする初期の立場が崩壊し、人間の絶望的な孤立があからさまに露呈した時、田辺は世界とは現実の否定的な活力に抗して構築される課題となった。

そこで、此の論文に於いて西田の「個」に対しての哲学からは「自己の連続性」「絶対無」、「絶対無の居場所」、「自覚」について述べている。

田辺は「種の論理」と西田の「個」からの

継承として、又それから発展させた「個」と「種」について数学的な演繹を行う。

もっとも田辺は「種」を論述することで個への論述を展開していく。

## 2.本論

## 2-1)「絶対無の自覚」について

西田は、我々は真の自己は宇宙の本体である。「体験」絶対無の自覚に裏付けられたものであり、最後の一般者が求められたものとしてだけでなく、与えられたものとして存在している。

「場所」は自発的に自己を限定するものではないはずである。とし、逆に、限定によって初めて「場所」は「場所」として現れる。

西田は「自己の連続性」とは自己を無限に切断し倒木にしてゆくことである。そのことにより西田はさらに「絶対無の居場所」とは「絶対無の自覚」は自己が自

己の内に自己を限定することである。

自覚の意義は自己を無にして自己を観ることによる。自己を失うことが真に自己を得ると。

そこで、無限に自己を否定することはこれを数学的に演繹で表すと自己を無にして見ることによって一切が自己となる。

まず「自己の無」とは次の様に表される。

$$\text{「自己の無」} = \lim_{\text{自己} \rightarrow \text{無}} \text{自己} = 0i \quad \dots \textcircled{1}$$

と定義する。

即ち「絶対無の自覚」とは、自己の無の否定であり、即ち次の様に定義する。

2-2) 「絶対無の場所」について

$$\begin{aligned} \text{「絶対無の場所」} &= \text{自己の無の否定} \\ &= \frac{1}{\lim_{\text{自己} \rightarrow \text{無}} \text{自己}} = \infty i \quad \dots \textcircled{2} \end{aligned}$$

よって「個」とは

$$\begin{aligned} \text{「個」} &= \frac{1}{\lim_{\text{自己} \rightarrow \text{無}} \text{自己}} \cdot (\lim_{\text{自己} \rightarrow \text{無}} \text{自己} \cdot \text{So}) \\ &= \infty i (0i \cdot \text{So}) \quad \dots \textcircled{3} \end{aligned}$$

より定義される。

よって「個」とは

「種」を予想し、種の生命をその根源とす

る。「個」は「種の連続なる限定」を母胎とする。

個は自らの根源たる「種」を否定し自存とする。分有に対する分立であるし、「個」は自責を伴うものである。

よって「個」とは絶対無の自覚による種を予想し種の生命をその根源とする。

③式の $\infty i$ は種の生命を、すなわち

「絶対無の場所」である。

$0iSo$  は絶対無の自己とし、

ここで  $So$  は理性、悟性等である。

2-3) 「種」について

田辺の「種」とは血縁や地縁によって結合する共同体として構想され具体的には「民族」が主なものである。

また互いに同類と認識しあう団体の集合である。

よって個は種に反抗し拒否されるが無の対立の弁償法から「種」という統一が生じる。

田辺の弁証法においては有無を超えて働く否定即肯定の媒介が「絶対無」であり、有無を超えて働き、そして絶対者が想定される。

3. 考察

3-1) 「絶対無」について

田辺は西田の「絶対無」について

次の様な批判を行う。

絶対無の自覚といったものは「宗教的体験」としてのみ認められるもので「哲学的体系の原理」ではあり得ないと述べる。

和田と林はこの絶対無について 2-2 の「絶対無の自覚」から絶対無の場所を限定し得る。

西田は意識の本質を自覚としたが西田のいう「自覚」には宗教的「悟り」という意味も込められている。

田辺がいうには自己は絶対無の場所を限定できない。と述べる。

然し、和田と林は西田の云う自己を無にすること、即ちこのときの自覚は  $O_i$  ( $i=0.1 \dots, u$ ) で括られるもので、よって「絶対無の自覚」とは自己を否定することから  $\frac{1}{O_i} = \infty_i$  として限定される。

即ち「絶対無の自覚」から最後の一般者となる。

よって個は実は田辺の「個」も実は西田の連続性のうえに成り立っている。

自覚を田辺は孤立の上に身を置く。連続とは個の自覚の孤立の点の連続であり、西田ともともと田辺は深淵のなかで結ばれているのだ。

### 3-2) 「個」について

一般的に西田、田辺の云う「個」と云うの短絡的に「自覚」の「絶対無の場所」として「虚空」即ち神を限定し得ると考えられる。

田辺は「個」を「種」の中に置いてみるのである。「種」から「個」へと。

和田、林は「個」について次の様に定義する。

「絶対無」から「絶対無の自覚」として「個」が限定される。それは対である。

$$\text{「個」} = \infty_i (O_i S_o)$$

絶対無の自覚の連続として表されている。

( $O_i S_o$ ) は絶対無の自覚であり、 $S_o$  は後で述べる或る「種」の基底である。

ある種の中で限定された自覚は連続であ

り「絶対無の場所」となる。

$\infty_i$  は「絶対無の場所」である。

それは「絶対無の場所」とは「絶対無の自覚」の否定により限定される。

また此处で合田氏は「種の論理」論争をめぐっての中で、「かつてすでにそこにもあった」式の発見ではない。またそうであってはならないと。

然し、和田と林は次の様に反論したい。もしも哲学的思想が論理的に説明できることを西田も田辺も望んでいたように思う。

即ち思想概念をある意味間違った方向へは導かない。それは数学的演繹がその数学的であるゆえに間違った方へ展開されたとなるなら、それは数学的演繹はある意味儀であると。しかし儀の否定は真でもあり得る。

だから、和田、林は直感的な感覺的思想を説明すべき哲学的思想には沢山の数学的な演繹をする哲学者が多く輩出されることを望む。

### 4. 結論

和田と林は西田と田辺を結び付けてその接点たる哲学の成り立ちを説明し得たように思う。

我々は西田の「絶対無」から「絶対無の自覚」により「個」と云う概念を数学的演繹により導いた。

田辺は「個」という概念を「種」から導出した。然し、田辺は自己を孤立の中に置くことによって、その数学的思想は発展していく。

田辺も実は西田の「絶対無の自覚」の中に根差していたと思われる。

西田の云う「絶対無の自覚」が連続性の中

に思い出されるのに対し、田辺は連続を切断すると孤立と云う中に根ざしていたのである。

二人とも「個」を西田はアナログ的に田辺はデジタル的に思想したものの結果のように思われる。

西田と田辺の思想を我々は結びつけて考えることに思想体系を思想しえたと云える。

あまりにも西田は禅の体験に田辺は孤立のうらに身を置くなかに於いて、二人の接点を我々は見出し得た様に思う。

残された哲学的思想として世界について西田の世界と田辺の世界の接点を思い出したいと思う。

#### 参考文献

- (1) 渡辺和晴“田辺元における弁証法の展開Ⅱ－大正から昭和への思想史－”  
愛知教育大学研究報告 29  
(人文科学編)P97～112(1980)
- (2) 和田、林その他“田辺元の哲学への序章”情報処理学会全国大会 PP4－397～398(2023)